

1934年～1945年 新東工業グループの創業

豊田自動織機製作所で豊田佐吉氏の薰陶を受けた久保田長太郎がモールディングマシン(造型機)の開発に着手し、国産第1号の造型機を製作しました。その後、鋳造機械製造の技術開発を進め、1934年に新東工業の前身である久保田製作所を設立したのが当社の原点です。日本の鋳造技術の向上と鋳造設備の国産化に尽力し、日本の近代化を支えました。

新東工業の歩み

1946年～1973年 鋳造技術の深化

戦後の混亂期を乗り越え、さらなる発展に向け、造型機単体だけでなく鋳物の製造工程全体をカバーする鋳造プラントの開発を推進しました。この間、表面処理、環境、搬送分野へ事業の多角化を進めるとともに、米国ホイールアブレーテー社との提携により技術力の向上が加速しました。創立25周年(1960年)には、次の成長に向けた転換期と捉え、新東工業へと改名しています。

1974年～1990年 企業基盤の整備と海外展開

「総合エンジニアリング体制」「国際的企業への飛躍」を旗印に企業基盤の充実を図りました。鋳造では「Vプロセス」「静圧造型法」などの画期的な技術の開発により世界の注目を集めることとなりました。そして、台湾を皮切りに欧州、北米、南米、東南アジアと海外拠点を整備し、現在のグローバル基盤の礎を築いてきました。

1991年～2005年 成長に向けた企業体质の強化

事業環境が大きく変化する中、進化し続ける組織作りに向けた企業体质の強化に加え、米・欧・アジアの世界3極体制を確立し、海外への技術移転を積極的に進めました。また、事業ごとの独立採算を進めるとともに、新たな収益源として設備メンテナンス・アフターサービス事業の強化・充実を図り、利益体质を確立する3魅一体のビジネスモデルを構築しました。

2006年～2017年 One Global Sintoの強化

人材に関する独自の考え方「活人主義」を打ち出し、人材の育成と活性化を強力に推進してきました。また、新東工業グループとしての連結体制強化に向け、国内外のグループ会社を再編、コンプライアンス、リスク管理を含むガバナンス体制を強化しました。さらに、時代の変化が徐々に激しくなる中、社会のニーズに即応し、EV、ロボット、医療関連の新分野の技術開発に着手してきました。

2018年～ 持続可能な社会の実現に向けて

2034年の創業100周年に向け、社会に認められ必要とされる企業として、SDGs達成、カーボンニュートラル実現など持続可能な社会の実現に貢献していきます。さらに、社会のニーズに応えられるよう、今まで培った技術の応用により、さらなる技術開発を進め新たな価値を提供することで、企業価値の向上につなげていきます。

鋳造事業



鋳物の後処理から派生

表面処理事業

1950 ショットブラスト国産1号機
 砂落とし、バリ取り
 1956 ピーニング
 1962 スチールショット、研磨材
 パレル研磨

鋳物部品の後処理

投射材・研磨材の拡充 / 表面処理技術の追求

表面処理技術の追求

2015 金属磁性粉末
 微細・精密加工
 2022 異種材料接合

2014 表面評価技術
 製品表面の可能性を拓げる表面処理技術

鋳物工場の公害防止から派生

環境事業

1950 集塵

1972 工場排水処理

公害防止

工場の労働環境改善

1990 ダイオキシン除去

2000 ガス処理

2020 磨き床
 2016 ニオイ検知
 2021 粉塵火災対策システム

働く人の安心につながる環境技術

培った技術・ノウハウに新たな技術を付加し、新事業分野へ挑戦

特機事業

1935 混練

1950 空気輸送

1970 ふるいわけ 1972 造粒

粉体処理技術の深化

鋳物の砂処理から派生

铸造プラント技術の応用

バレル研磨機用の消耗品として開発に着手

マテリアルハンドリング技術の強化

1994 クリーンロボット
 1999 車いす用段差解消機

物流業界を支える搬送技術

新事業

- 電子・電池分野に貢献する技術
 2015 定量補給・調合・ハンドリング
- EVの生産に欠かせない技術
 2009 精密電動プレス
 2019 高圧ロールプレス
 パワー半導体テスター
 電池製造システム
- 製造工程を変える自動化技術
 2019 力覚センサー
- ものづくりが進化する3D技術
 2017 セラミックス3Dプリンター
 2022 3Dものづくり

(注)グラフは売上高の推移を表したものです。

1927 1934 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000 2010 2022

1927～
 造型機は全て輸入に依存。日本は鋳物づくりの技術が乏しく、造型機本来の機能を発揮することが至難だった。

1955～
 高度経済成長期(1955～1973年)に入り、自動車需要の急速な進展に併せて、銑鉄鋳物生産は急拡大。増産の必要性から設備投資意欲が高まり、鋳造機械の需要が増加。

1967～
 高度経済成長は国民生活を豊かにする反面、公害問題が深刻化。公害対策基本法が公布される。

1973～
 石油危機の始まり。石油の99%を輸入に頼ってきた日本の産業は、大打撃を受ける。

1990～
 急激な金融引き締めにより、異様とも言える熱気に包まれていた日本のバブル経済が崩壊。デフレ経済へと突入。

2008～
 リーマンショックにより、米国や欧州のみならず、新興国の景気も急速に悪化し、積極的なグローバル対応を推し進めてきた日本の製造業も影響を受け、設備投資関連業界が鈍化。

2011～
 東日本大震災の発生で建造物、鉄道・道路・空港・電力・ガス・通信をはじめとするインフラ、企業の損害、また被災地域のみにとどまらず、日本中のサプライチェーンが壊滅的な損害を受ける。

社会状況